

展覧会

『暮らしの中の造形展 — 田上絣と手拭』について

丸山 徳次

里山ORCは、2008年5月16日（金）から5月24日（土）まで、『暮らしの中の造形展 — 田上絣と手拭』を龍谷大学瀬田学舎RECホール・ロビーにて開催しました。8日間の開催期間中、約950人の来館者があり、大きな成果をはたすことができました。

里山ORCでは、「里山」を単に里近くのヤマ（森林）とのみ解するのではなくて、里と山とが有機的に一体を成した「文化としての自然」として捉えてきました。そして、とりわけ社会人文科学・地域共生学調査研究を実施する研究班2は、田園が広がり、豊かな歴史を湛える上田上（かみたなかみ）の里における暮らしに、格別の関心をもつようになりました。田上郷土史料館の館長である東郷正文氏（真光寺住職）との出会いが、ひとつの大きなきっかけでもありました。こうして2007年春、研究スタッフの須藤護を中心に民俗文化班を組織して聞き取り調査を開始し、民具と過去の暮らしにおける女性の姿に、とくに注目するようになりました。「田上絣と手拭」を中心とした『暮らしの中の造形展』は、そうした調査研究の成果の一端を地元の方々に公開することによって、過去の暮らしに改めて眼を向け、世代間を結びつけるよすがとしていただくばかりか、広く一般の皆さんに見ていただくことで、田上の豊かな暮らしを通して、未来の可能性に思いをはせていただくことを願うものでした。

本展覧会は、田上郷土史料館（大津市上田上牧）が収集・所蔵してきた民具や織物、また田上地域の民家に大切に保存されてきた民具などを中心に展示するものでした。瀬田丘陵の南部に広がる田園地帯である田上には、女性たちの伝統的な暮らしがノラとヤマとに深く結びついていたことを教えてくれるたくさんのモノが残されています。竹カゴやワラ製品のみならず、洗練された意匠に満ちた「田上手拭」や絣（カスリ）・縞（シマ）の織物は、その造形を通して、山仕事や野良仕事、そして社会生活のあり方を今

に伝えてくれています。日々の営みの中でなされる手仕事において田上の女性たちが使い続けてきた道具、身につけていた衣装、その造形ひとつひとつには、自然の大きなサイクルと共に生きる里山のくらしの知恵が詰まっています。地域に蓄積されてきた文化の厚みと豊かな生活を再認識する機会をもつとともに、人々の創意工夫によって物や道具が大切に扱われ、次の世代に継承されてきたことを感じていただく機会となることを願う展覧会でした。庶民の日常生活の中から生まれた造形の背後に存在する生業（農耕・山仕事など）や社会生活の在り方について、これまでの調査でわかってきたことを、写真や史料とともに民具や織物などの展示を通して、学生および一般市民の皆さんに広く公開する本展等会は、幸い多くの方々の関心をよび、好評を博すことができました。

期間中、5月17日（土）には、午後1時半から「近江はたおり探検隊」による「綿繰り・原始機の実演、体験会」が行われ、午後3時からは東郷正文氏が「田上郷土史料館のなりたち」と題して講演をして下さいました。講演後の質疑応答では、2007年12月のシンポジウム「瀬田山会議－大津の里山の過去と未来」でパネリストの一人となって下さった古市秀樹氏が、コメンテーターとして参加して下さいました。「近江はたおり探検隊」による実演会は、5月22日（木）にも実施され、同時に機織りの思い出について上田上の方々が話して下さいました。

ご協力いただいた上田上の皆さん、とりわけ東郷正文氏に、改めてお礼申し上げます。来訪いただいた方々からたくさんのお言葉をいただきましたが、その中から次の一句を紹介させていただきます。－「用の美の原点あふる初夏の展」